

**ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業
取組の概要と選定委員会からの主なコメント**

代 表 校 名 (連 携 校 名)	名古屋大学 (岐阜大学) 計2大学
事 業 名	医療人類学とバーチャル教育を活用した屋根瓦式地域医療教育 (濃尾+A)
事 業 責 任 者	大学院医学系研究科 総合医学教育センター長 教授 錦織 宏
事 業 の 概 要	
<p>本事業では、将来の地域医療に貢献する医学生に対して地域への興味や学術的探究心、貢献意欲を涵養するために以下の特色ある取組を実施する。①医療人類学の知見を活用して、患う人の苦悩や、地域に潜在する医療問題に着眼する医療人類学的地域医療教育を実施する。②地域医療機関に出向くオンサイト実習とバーチャル学修環境を融合して、地域医療と最先端医療の接続を体験する取組を実施する。③地域卒卒業生の医師が卒前教育に積極的に参加する屋根瓦式地域医療教育を実施する。④地域医療教育に特化した電子ポートフォリオを構築する。⑤地域医療教育に関与する学外医療機関に対して指導者養成 (FD) をオンライン・オンサイトで定例開催する。連携のポイントは、名古屋大学では医療人類学者の教員が加わることで関連する知見や学術的探索のノウハウを共有し、岐阜大学は指導者養成 (FD) やバーチャル教育に先進的知見を提供する点にある。</p>	
選定委員会からの主なコメント ○ : 優れた点等、● : 改善を要する点等	
<p>○医療人類学を活用する点は独創的である。</p> <p>○バーチャル環境による教育の開発・活用は、ポストコロナ時代の人材育成に適した取り組みであり、他機関のモデルとなることが期待される。</p> <p>○本事業における2大学の役割分担は明確であり、さらに実施基盤として地域医療教育連携推進室を2大学に設置することで実施体制は充実することが期待される。</p> <p>○地域卒卒業生の働く連携施設をフィールドとしているので、キャリアデザインの観点からも持続性を期待できる。</p> <p>○学修環境の開発、カリキュラムの構築・導入・評価について具体的に記載されており、着実な事業の実施が期待できる。</p> <p>●全体の養成目標人数、特に申請校の人数が少なめに設定されている</p> <p>●事業主体者と評価者 IR 室が同じであることは客観的評価の阻害因子である。両大学ともに地域医療学講座中心で医学部全体で取り組む姿勢に乏しい。</p> <p>●事業終了後には外部資金によって継続する計画となっているが、安定的な継続運営を目指して多面的な計画を検討した方が望ましい。</p> <p>●5G 回線を使ったバーチャルローテート実習の維持費と機材更新費が高額になる可能性があり、継続性の面で不安が残る。</p> <p>●3 年目以降の計画は前年と同じであり具体性が乏しい。</p>	